自傷傾向者は自己と他者をどのように捉えているか？

自傷傾向と現実感，境界感覚および他者への自己拡張の知覚との関連性

○本元小百合[1]，菅村玄二[2]
([1]関西大学大学院心理学研究科，[2]関西大学文学部)

keywords：自傷行為，身体接触，離人感

問題・目的

自傷行為者の臨床的特徴の一つに，離人感が挙げられる（林，2007；筒井，2006）。離人感とは，「自分が自分である」「自分はここにいる」という自己の実体感や外界とのつながりが希薄になる体験を指し，自我境界の弱化（Federn, 1953）や自己感覚の希薄化（筒井，2007）と表現されることもある。自己の実体感や現実感は身体感覚と密接に関連しており（福留，2000；春木，2011），皮膚感覚はその一つである。タッチケアなど身体接触を用いた介入が離人症の低減に有効であることや（Kempson, 2005），臨床群は健常群に比べて過去に両親から触れられた体験を少なく知覚していることから（山口・山本・春木，2000），皮膚への接触は自己の感覚への気づきを促し，健康な自己に大きく作用するといえる。

しかし，自傷行為者の自己の特徴については理論上の指摘にとどまるものが多いため，実証的に精査していく必要がある。そこで，本研究では，現実感覚や感覚刺激への反応性を自我境界の指標とし，自傷傾向が高い人は，自我の境界感覚が薄く，他者への自己拡張が起こりにくいのか，また両親から受けた身体接触量は，自己の境界感覚の明確さと関連するのかについて検討する。

方法

調査手続き

関西大学の学生59名（男性6名，女性52名，未回答1名，平均年齢=20.9，*SD*=0.67）が質問紙に回答した。その際，本調査は強制でない旨を伝えた。なお，回答終了後にHTPテストとレパートリーグリッドテストを行ったが，本発表ではその結果を割愛する。

使用した尺度

自傷傾向尺度　角丸（2004）の自傷傾向尺度用いて，自傷のしやすさに関する質問計17項目に「いいえ（1点）」，「どちらでもない（2点）」，「はい（3点）」の3件法で評定してもらった。また，自傷経験の有無や自傷した理由などについても多肢選択方式で回答してもらった。

過去の身体接触体験量　鈴木・春木（1989）の身体接触量尺度を用いて，生まれてから今までの母親と父親からどの程度触れられたかを「1点=まったく触れられなかった」～「10点=非常によく触れられた」の10件法で回答してもらった。

自我境界の明確さ　自我機能調査票（中西・古市，1981）の下位尺度である「外界と自己の現実感覚」と「刺激障壁」を用いて，現実感の薄さや感覚刺激への過敏性を測定した。この2つの下位尺度はそれぞれ8項目からなり，各項目ついて「0点=まったくあてはまらない」～「4点=非常によくあてはまる」までをリッカートで回答してもらい，これらにあてはまらない場合は「わからない」を選択してもらった。分析の際，中西ら（1981）にならい，「非常によくあてはまる」から「まったくあてはまらない」までを順に5点から1点，「わからない」を3点として，得点を換算した。

他者への自己拡張の知覚　Inclusion of Other-Self Scale（IOS scale）を用いて，一般的な他者に対して自己拡張がどの程度なされているかを7件法で測定した。Aron & Aron（1992）が作成したものをPaladino et al.（2010）が改変したものを使用した。

理想の自己への自己拡張の知覚　IOS scaleと同様の評定方法で，「こうありたい」と思う自己に対して，現実の自己がどの程度拡張しているかを7件法で測定した。

結果

自傷傾向と自我境界の明確さとの関連性　自傷傾向得点の平均値（M=1.51, SD=1.52）をもとに，自傷傾向高群（n=26）と低群（n=32）に群分けをし，外界と自己の現実感覚，刺激障壁についてt検定を行った。その結果，自傷傾向高群（M=18.85, SE=1.01）は低群（M=13.66, SE=0.90）よりも現実感が薄かった（t[53.45]=3.83, p<.001, d=1.01）。また，自傷傾向高群（M=29.54, SE=0.88）は低群（M=25.91, SE=0.89）より外界の刺激に対して敏感であることがわかった（t[55.44]=2.90, p=.005, d=0.76）。

自傷傾向と自己拡張の知覚との関連性　自傷傾向高群（n=25）と低群（n=32）とで他者および理想の自己への自己拡張の知覚に差があるかどうかを比較したが，有意な差はなかった。そこで，自傷経験があると答えた人（n=16）とないと答えた人（n=40）に分けて比較したところ，自傷経験がある人（M=3.43, SE=0.19）はない人（M=2.63, SE=0.26）よりも他者との親密度をより低く知覚していることがわかった（t[32.70]=2.50, p=.018, d=0.69）。しかし，理想の自己への自己拡張に差は見られなかった（t[32]=-0.30, p=.77, d=0.09）。

身体接触体験量と自我境界の明確さとの関連性　父親と母親から受けた身体接触量の平均値を両親から受けた身体接触量（M=5.18, SD=1.66）とし，両親から受けた身体接触量と外界と自己の現実感覚（M=15.97, SD=5.66）および刺激障壁（M=27.58, SD=5.06）について相関分析を行ったが，有意な相関は見られなかった（-.021<r<.031, ps>.80）。

考察

結果より，仮説は一部支持されたが，自傷傾向と理想の自己への自己拡張，身体接触量と自我境界の明確さには差が見られなかった。理想の自己への自己拡張については，どの参加者も年齢的に自我同一性の獲得の最中であることが要因と考えられた。身体接触量と自我境界の明確さについては，サンプルサイズが小さいことや，今回は比較的健康な人を対象にしたため，身体接触量に大きな差がなかったことが要因に挙げられた。今後は，データ数を増やし，参加者を臨床群と健常群にスクリーニングするなどして，比較・検討していくことが望まれる。

© 日本認知心理学会